

## 『清水ヶ丘教会の源流』

牧師 島田勝彦

わたしたちの教会はこの横浜の地に宣教を開始して六五周年を数えます。つい先頃50周年をお祝いしたことを思うと、もう70周年の区切りに近づいているのかと、驚きを禁じ得ません。しかし、2009年に横浜開港150年、プロテスタント宣教150年を記念したことを考えれば、もう100年を超える諸教会が珍しくなくなってきました。

わたしたちは、こうしてみるとまだまだキリストの背丈に届くまで体を伸ばしつつ成長を志さなければなりません。

- ・キリストのいのちが、すみずみにまで行き届く、群となりますように。
- ・キリストの願いがそのままわたしたち、この群の願いとなり、祈りとなりますように。
- ・キリストが喜ばれることをわたしたちの喜びとし、この群の意思とすることができますように。
- ・キリストにわたしたちの内なるところ、心の底から支配され、思いと、ことばと、その為すところをきよめていただけるように、祈り続けましょう。

さて、こうした、前に向かって新しい一步を踏み出そうとするとき、もう一度清水ヶ丘教会が、エルンスト・ラング宣教師や倉持芳雄牧師の姿勢を探り、土台を確かにおきたいものです。それは伝道者の姿勢でした。福音を宣べ伝えること、そのために何でもする、姿勢でした。「横浜福音医療宣教団」「横浜ミッション診療所」「横浜ミッション教会」を土台とする、ということ。「宣教」、「ミッション」、いずれも福音伝道を抜きに意味しない言葉です。

ですから、清水ヶ丘教会が、これからもまず第一にすることは伝道である、ということ。

私たちの日本基督教団の最近2年間、強調されてきたことは「まず伝道する教会、伝道する教団を目指す」というものでした。教勢の極度の衰退を自覚し、教会本来の役割を果たそうと出発いたしました。その作業が途につかないうちに、昨年3月11日、地震・津波そして原発という三

重苦を経験したのです。以来、伝道と復興が教団全体の課題となりました。伝道だけがテーマではなくなったのです。一見するとこれは相反するものを抱え込んだように感じます。伝道と言う喜びに対し、復興を余儀なくされている悲慘がそこにあります。伝道という希望に対して、先が見えない復興と言う絶望があります。これでも私たちは喜べるか、これでも私たちは祈りうるか、これでも私たちは感謝できるか、問い返されるのです。しかし改めて伝道と復興、これは相反するものとしてではなく、これこそ今私たちが少なくともイエス・キリストにあって生きようとする者に与えられた、時の標ではないかと思えます。

伝道とは、「道であり、真理であり、いのちである」イエス・キリスト、この方によらなければ神のみもとに近づくことも、行くこともできない、この道を伝えるのです。イザヤ51:1「義を追い求め、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴とを思いよ。」

伝道とは、この方によって、罪の縄目から解き放たれ、信仰の巖となるために、掘り出された喜びを伝えるのです。

これはこの道を見いだした者、この喜びにあずかった者すべての務めです。ひとりも傍観者ではありません。「ひとりが、ひとりを」。この願いと祈り、目標は、先達たちの常に信仰生活の課題でした。自分の救い、自分の安らぎ、自分の不足、それら一切をイエスさまにおまかせしきって、ひたすら傍らの隣人に祈りと力と思いを尽くす者たちによって、この教会が成長してきました。そこには人々を唾然とさせるようなスローガンも、テクニクもありませんでした。

- ・キリストの願いがそのままこの群の願いとなり、祈りとなりました。
- ・キリストが喜ばれることを喜び、この群の意思としていました。
- ・キリストに自らの内なるところ、心の底から支配され、思いと、ことばと、その為すところがきよめられることを願って祈り続けていました。

伝道する教会として、この教会の最初からの姿勢にぶれることがありませんように！